田坂広志の「深き思索、静かな気づき」

「共生」という思想を超えて

1977年にノーベル化学賞を受賞した、イリヤ・プリゴジン博士が、かつて、その著作の中で、次の言葉を述べている。

我々人間は、自然から生まれて、
なお、自然の一部である。

この思想は、21世紀において、極めて重要な思想となっていくだろう。

なぜなら、我々は、永く続いた欧米文化の影響で、「自然」と「人工」というものが対立的な概念であると教えられてきたからである。

しかし、これからの時代の地球環境問題に処するためには、実は、この概念そのものを、再考する必要がある。

その再考のために、重要な示唆を与えてくれるのが、『ソラリスの陽のもとに』などの作品で世界的に知られるSF作家、スタニスワフ・レムの問題提起である。

彼は、ある随想の中で、次の問題を提起している。

我々は、森の中で蜂の巣を見つけたとき、その美しい六角形の幾何学模様の巣の形を見て、「自然の造形は、何と美しいのか」と感じるだろう。そのとき、我々は、それを「自然」の営みと思い、決して「蜂工」とは思わない。

しかし、我々は、人間が作ったものを「人工」と考え、自然が作ったものを「自然」と考える。

それは、なぜか?

このスタニスワフ・レムの問いかけに対する答えは、明確であろう。

欧米文化においては、「自然」というものは、常に、「人間」の科学や技術によって「征服」されるべき対象であったからである。そのことが、「自然」と「人工」を対立的な概念とする思想を生み出してきた。

そして、この欧米文化に由来する思想が、近年の日本文化にも、強い影響を与えている。

その一つの象徴が、深刻化する地球環境問題や地球温暖化の中で、しばしば使われるようになった「共生」という言葉であろう。すなわち、自然環境や地球環境を破壊することなく、「人間」と「自然」が共生するという思想である。

この言葉は、いまや、環境問題を語るとき、必ず使われるキーワードとなっているが、実は、日本の文化において自然を語るとき、この言葉は、最も深い思想を述べた言葉ではない。

なぜなら、この「共生」という言葉は、善き願いを込めた言葉ではあるが、その背後に、依然として、「人間」と「自然」を別なものと考える思想が潜んでいるからである。そのことは、この「共生」という言葉を、英語に訳してみれば明確であろう。

「共生」は英語にすれば“Living with Nature”、すなわち「自然と共に生きる」である。

では、日本には、どのような思想があるか。

「自然(じねん)」の思想である。

これは、仏教においては「自然法爾」などの言葉としても使われるが、その意味は、文字通り「自ずから然る」。これも英語に訳してみると、その意味が明瞭に見えてくる。

「自然(じねん)」とは英語にすれば“Living as Nature”、すなわち「自然として生きる」である。

なぜなら、欧米とは異なり、この日本という国においては、「自然」とは科学や技術によって「征服」する対象ではなかったからである。

日本人にとって、「自然」とは、我々「人間」を生み出し、育て、優しく見守る「大いなる母」のごとき存在であった。その背景には、この日本という国に永く伝えられてきた「自然崇拝」や「自然信仰」の宗教的思想がある。

この「共生」という思想と、「自然(じねん)」という思想。英語にすれば、わずか一文字、“with”と“as”の違いであるが、その意味の違いは、実は、極めて深い。

21世紀、直面する地球環境問題を解決していくために求められるのは、新たな科学や技術、法律や制度だけではない。真に求められるべきは、「自然」というものを、どう見つめるか。その「自然観」の根本的な転換である。

されば、この21世紀、日本という国が、人類全体の「自然観」の転換に果たすべき役割は、極めて大きい。Ⓕ

HIROSHI
TASAKA

田坂広志◎東京大学卒業。工学博士。米国バテル記念研究所研究員、日本総合研究所取締役を経て、現在、多摩大学大学院教授。世界経済フォーラム(ダボス会議)GACメンバー。世界賢人会議Club of Budapest日本代表。著書は『人生で起こること すべて良きこと』(PHP研究所)など80冊余。tasaka@hiroshitasaka.jp